第325号（平成22年11月号）

国リハニュース

国立障害者リハビリテーションセンター広報誌

盲ろう者宿泊型生活訓練等モデル事業がはじまりました

目　次

〔巻頭言〕
自立支援局長「外来語の漢字表記をめぐる雑念」…… 2

〔センター行事〕
第31回リハ並木祭を終えて …… 3

〔国際協力情報〕
第１回医療機器の世界フォーラムに参加して…… 5

〔自立支援局情報〕
盲ろう者宿泊型生活訓練等モデル事業が
はじまりました…… 7

就労支援セミナーの開催報告…… 8

〔病院情報〕
健康増進センターの開設について…… 10

2010ウィルチェアーラグビー世界選手権に参加して…… 13

〔研究所情報〕
第37回国際福祉機器展（HCR2010）への
研究所の出展報告…… 16

〔学院情報〕
学校説明会に105名が参加…… 18

〔統計数値〕
平成22年度リハビリテーション
実施状況（10月報告）…… 20

〔巻頭言〕

外来語の漢字表記をめぐる雑念

自立支援局長　江藤文夫

障害者の権利に関する条約のキーワードの一つは「合理的配慮」で、この配慮がaccommodationであることを知りましたが、手元にある英和辞典に「配慮」という訳語はありません。この言葉は個人的には宿探しで身につけたものですが、なるほど便宜を図るニュアンスであると理解しました。

グローバリゼーションの時代には、コミュニケーションの重要手段である言葉も変化します。われわれは、東アジアの辺境にあって、いわゆる中国文化圏のグローバル化に対応して中国語の文書を漢文として読み下すため２種類の仮名文字を生み出し、その手法を近代の欧米言語についても単語レベルで上手に適用してきました。文章表記に関しては、次第にカタカナ単語を増やして対応し、究極は森有礼が提唱したようにアルファベット（ローマ字）表記に移行するのかもしれません。

日本列島内でも江戸時代までは、東西の会話言語はかなり相違して、江戸勤務の東西異なる藩の侍同士の対話では筆談が併用されたようです。その間に国替えがしばしば行われ、急速な貨幣経済の普及と経済活動の拡大により国民の一体化が促進され、欧米近代文化の導入も順調に進めてきました。こうした社会の変化は言葉にも変化をもたらします。言葉の変化は世界中で生じているので、国際的に採用される日本の単語が増加する反面、幕末から明治初期に翻訳対応で作成された漢字表記の単語の使われ方にも注意を要します。

リハビリテーションには更生という訳語が当てられていましたが、医療で汎用されるようになると違和感を生じたようです。病名など専門用語に類するものも一般に普及すると不快なイメージから変更を命じられますが、病名などは漢字文化圏で先行してきたので残念に感じることもあります。ベトナムは、かつて漢字由来文字を使用していましたが、その国の病院で、リハビリテーション科を表記する文字の意味は機能回復ということでした。中国では康復、香港では復康、台湾では復健と漢字表記します。WHOにおけるキーワードの一つが健康で、さすが漢字の国です。

この健康概念を再認識して今日に至るWHO戦略の起源となったアルマ・アタ宣言（1978年）では、「地域社会または国家が自助と自己決定の精神に則り、…」プライマリヘルスケア（PHC）を普及させるといった文面があります。これが、今日のCBR（community based rehabilitation）の活動につながっていますが、コミュニティは、共同社会というニュアンスで、コミューンやコミュニズムと密接な言葉です。社会という言葉はsocietyを幕臣であった中村正直が仲間連中、福沢諭吉が人間交際と訳したごとく、日本にはない概念でした。中村正直はスマイルズのセルフヘルプという書物を「西国立志編」の表題で翻訳出版し、今日では「自助論」として新訳書が話題になっています。セルフヘルプグループが自立生活（IL: independent living）運動と関連して話題となったのは1970年代で、ノーマライゼーション理念の強調され始めた時期と一致します。さて上述のアルマ・アタ宣言にある「自助」はself-helpではなくself-relianceの訳語でした。そして米国には障害者のエンパワーメントを通じてILを推進するセンター（CIL）として、Self Reliance, IncというNPOが1978年来活動しています。セルフリライアンスは我が国の障害者活動では耳慣れない言葉のようです。

国連は国際条約の批准においては翻訳も課題として認識していますが、アジアでは中国語が優先されます。権利条約でも中国語訳は正文とされています。欧米外来語の漢字表記に関しては、これまで以上に同じ漢字文化圏として中国での訳語に注目すべきように感じます。障害に関わる海外情報を翻訳して国内に紹介する時に役立つかもしれません。

第31回リハ並木祭を終えて

リハ並木祭実行委員会事務局　総合支援課　山本　ななせ

去る10月23日（土）、澄み渡った秋晴れの空の下、国立障害者リハビリテーションセンターと国立職業リハビリテーションセンターの共同主催による、第31回リハ並木祭を開催いたしました。

一般公開の前日である22日（金）は、午後から開会式と内覧会を行い、開会式では司会進行、開会宣言を利用者実行委員が行い、和やかな雰囲気の中で取り行われました。テーマ及びポスターの表彰を行い、それぞれの最優秀作品及び優秀作品各１名に賞状と記念品が授与されました。テーマ部門の最優秀作品は、小山田　祥子さんの作品『十人十色～自分の色を見つけよう!!～』であり、一人ひとりの個性を尊重し、それぞれの未来へ進んで行こうという内容です。ポスター部門では、大津　和貴子さんの作品で、カラフルなピアノの鍵盤の上を、可愛らしい、女の子と犬が前進している様子が描かれた、さわやかな色使いの作品で、「ポスターを見ると並木祭に来たくなるような、楽しい雰囲気をイメージして製作した」という作者の気持ちが十分に表現された作品でした。この作品は、ポスターの他に、パンフレットに使用され、並木祭に華を添えました。

一般公開の23日（土）は、例年通り、訓練紹介、クラブ紹介、グルメストリートにおける模擬店、講堂での企画、特別企画の東京サロンオーケストラ恒例コンサート、地域団体からの企画参加等、賑やかに並木祭を彩りました。また、講堂企画の軽音楽部ライブや、ウクレレ演奏等、さらに本館玄関付近での地域団体による和太鼓の演奏や、修了生によるテルミンの演奏が行われ、来場者からも好評をいただき、その音に楽しく耳を傾ける光景が見られました。第一体育館ではツインバスケットボールや、車いすバスケットボール、ウィルチェアーラグビーの紹介や、現役の部員対OBの試合、体験会等が行われました。多くの方が見学、参加され、賑わいを見せました。迫力ある試合を行った選手も、体験会では穏やかな表情で丁寧に説明し、来場者と交流を深め、会場のあちらこちらで笑顔が見られました。

また、今年も多くの修了生の方が来場されました。会場のいたるところで職員や、利用者、修了生同士で「話の輪」が出来ていました。中には、十数年ぶりに来所された修了生もおり、思い出話が尽きないようでした。

第31回目の開催となった今回の並木祭ですが、実行委員の利用者の方を始め、多くの利用者のみなさんが、積極的に企画へ参加し、盛況のうちに終わることが出来ました。また、地域団体の皆様に参加していただいたこともあり、日々の活動についての報告や、交流・情報交換の場となり、「地域とのつながり」を深めることができました。並木祭の運営にご尽力いただいたセンター内外の多くの方々、並木祭を楽しみに来場してくださった地域の方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。また、今後ともご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

開会式（開会宣言）

東京サロンオーケストラと共演する利用者

お仕事広場の様子（１）

お仕事広場の様子（２）

にぎわうグルメストリート